北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

台湾社会における教育価値

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2008-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ヘイ, ユァンチュウ[著], 宇田川, 拓雄[訳] メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005291

北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）第53巻　第2号　　平成15年2月
Journal of Hokkaido University of Education (Humanities and Social Sciences) Vol. 51, No. 1　　February, 2003

台湾社会における教育価値

ヘイーユァン　チュウ　著[1)]

宇田川　拓　雄　訳[2)]

北海道教育大学教育学部函館校

緒　言

中国では教育は古代からずっと，非常に価値のあるものとされてきた．旧い中国ではごくわずかの人しか勉強の機会に恵まれず，教育を受けた人の地位は社会階級の中で最も高かった．学者，農民，労働者，及び商人という四つの階級のうちで学者は最高の地位に置かれていた．中国でよく知られた諺に，「人間にとっての全ての目標のうちで学問が最も尊い目標である」（直訳すると「全ては劣る，書を読むことだけが最も気高い」.）というものがある．教育を受ける機会がめったになかった伝統社会では，教育のある人は大変尊敬されていた．近代になって教育の機会が多くなり，特に普通教育【＝universal education, 職業教育ではない，一般の小中学校での教育】[3)]が必修となると，中国人，特に父母たちは少しでも上級の教育を子供たちに受けさせるため，あらゆる機会を利用しようとする傾向がある．

旧い中国では，家の名誉と物質的な利益が教育に対する二つの重要な動機であった．公的試験【科挙のこと】に合格したものは誰でも，その家と祖先に栄光をもたらしたという理由で非常に誉めたたえられた．試験に合格することによって，国家を支配している皇帝に仕える官僚制度の中の正式な官職に就くことができるので，このような名誉は明らかに，上流階級だけでなく下層階級の家族にとっても強い動機であった．古い格言に「朝，農家にいた者が，【試験に合格したため】午後には宮廷で皇帝に仕える」というものがある．従って，熱心に勉強し公的試験に合格するすることが地位と権力を獲得するための重要な方策であった．「書物の中には黄金の屋敷があり，書物の中には美女が住む」というよく知られた常套句もある．言い換えれば，Kung-min（公的な地位と学歴）【「功名」（科挙の合格資格の一つまたは合格資格そのもの）のことと思われる】を得ることがいつの時代でも素早く出世するための秘訣と考えられていた．ひとたび特権をもった教養ある官僚たちの仲間入りをしてしまえば，その人が過去にこうむった全ての屈辱は不問に付されると多くの人々が信じていた．従って，勉強すること，あるいは本来の意味を文字通りに訳すと，書物を読むこと，に非常に高い価値が置かれているのである．

しかし，学校は物質的な利益をもたらす，あるは少なくとも損失を防ぐとも考えられていた．旧中国の複雑な社会においては，【民間では】帳簿をつけたり契約を交わしたり，あるいは記録をとったり文通したりするために，多くの人々が読み書きができなければならなかった．多数の人々が官吏として地方政府で働いていた．公的試験に合格できる人はごく少数だったが，その数よりもはるかに多数の試験に合格できなかっ

---

1) 国立台湾大学　社会学部　中国研究院　民族学研究所

2) 北海道教育大学　教育学部　函館校　教授（社会学）

3) 【　】は訳注である．（以下同じ）

た学識者が存在していた．一般の人々も学問のある人々による職権乱用に対する自衛策として，読み書き能力を評価していた．(Rawski, 1979; B, 1982)

西洋の強国の大きな影響力により中国は大改革を次々と強いられていった．西洋の教育システム，あるいは日本の教育システムでさえ，それを取り入れることが中国を近代化させるための重要な一歩と考えられた．始めのうち，新しい教育形態は余り普及せず，人々の評判も良くなかった．改革の主導者によって形成された世論や改革を促進しようとするいくつかの雑誌は新しい教育を好んだが，一般の意見は無関心あるいは敵意を持ったものだった．新しい学校は保守的な上流階級にも文盲の大衆にも歓迎されなかった．しかし，状況は瞬く間に変化した．新しい教育システムは確立され，人々に急速に受け入れられた．Woodside(1989: 45)は，中国が，20世紀初頭になって開始した学校の改革が前例のないほどのスピードで進んでいったと述べている（新しい形態の学校の数は，1907年には37,888校であり，1912年には87,272校であった）．

台湾における教育の拡大

台湾に系統だった西洋スタイルの近代教育が登場したのは20世紀始めだった．それは当時台湾を支配していた日本の植民地政府によってもたらされたものである．それ以前にも試みはあった．1870年代から，スコットランドやカナダのキリスト教会が近代的な学校を設立し始めた．清王朝の Liu Ming Chuan【劉銘伝，台湾巡撫（省の長官）】も新しい教育のシステムをつくろうとした一人である．しかし，その試みは成功しなかった．つまり，台湾の近代教育は日本の植民地政府が設立したのである．第二次世界大戦の終結時には，台湾にはすでに，1,000校以上の小学校と44の高校，いくつかの職業高校と師範学校，短期大学が３校，大学が１校あった．これらの学校のうち小学校より上のレベルのものは全て現在でも一流の学校である（表１）．また，台湾における教育のシステムや，人々の教育に対する態度は，日本の植民地政策に強く影響されたものだった．例えば，1944年に６歳から11歳までの子供で，男子は80%，女子は60%が小学校に通っていた．

表１　1994年の学校数及び生徒数

全公立校	小学校	中学校（男子）	中学校（女子）	師範学校	職業校	短期大学	大学
994a	155	22	22	3	27	3	1
876, 747b	55, 778	15, 172	13, 270	2, 888	14, 628	1, 457	360
876, 728c	5, 044	7, 230	4, 855	522	9, 212	240	122

a：学校数
b：全生徒数
c：台湾人生徒数

しかし，中国に返還された後の台湾では，あらゆる教育機関は中華民国の法規や政策にしたがって，形を変えられてしまった．さらに見逃してはならないものは，台湾の全ての人々が，いまだに中国の昔ながらの文化的伝統を共有しており，その中に教育の価値に関する伝統も含まれていることである．言い換えれば，台湾における近代的な教育システムは日本によって始められたものであるが，現実に主要な役割をはたしているのは中国の社会的・文化的要因なのだ．統計を見ると，日本によって植民地支配されていた1940年代から，中国に返還された後の1950年代にわたって，台湾における小学校就学率は一貫して伸びていることがわかる（表２）．日本による植民地支配の最後の年である1944年に，６歳から13歳までの児童の就学率は，男

子で80.86%，女子で60.94%であった．7年後の1951年になると，男子で93.44%，女子で68.58%であった．就学率の男女差は植民地時代の差をその差を引き継いでいると考えられる．1960年までには，児童の就学率は男女とも90%を越え，1980年には99%を越えた．

近代において，世界のほとんどの国は教育の拡大を計っている．Meyer(1977)らによってもこのことは力説されているが，台湾における教育の拡大は他国のそれとは同一視できないほど早く進んだ．表3を見ても分かるように，台湾における中等教育全体への就学率は，1990年で85.4%にのぼっている．これは，統計の対象とした各国の中で，日本とアメリカに次ぐ高い数字である．高等教育についても，台湾の34.1%はアメリカ合衆国と韓国に次いで，やはり高い位置を占めている．こうした数字から，台湾では他に類を見ないスピードで教育の拡大が進んでいることがわかる．台湾における就学率の伸びが経済成長にも大きな役割をはたしていると考える学者もいる．筆者はこの考えに賛成していない(Chiu, 1989)が，こうした急激な教育の拡大について正確に検証することは必要であると考える．また，アメリカにわたった中国人の多くが，非常に優れた教育上の業績を上げていることも重要かつ明確な現実である(Ramist and Arbeiter, 1986)．従って，台湾においてこのように急速な教育の拡大がおこった理由を追及することは有意義であろう．そのためには構造的要因および文化的要因について検討する必要がある．

第一に，小学校卒業者の多くは中学校に進学することを希望するが，その多くは進学できない．中学校の定員は限られている．従って，中学校に進学するためには非常に厳しい競争をくぐり抜けなければならない．1969年以降，政府は中学校の普通教育化のための政策を進めてきた．しかし，高校の定員以上の数の中学卒業者が高校進学を希望しているし，大学の定員以上の高校卒業者が大学進学を希望している．毎年，大学入学のための統一試験を受ける高校卒業者のうち，合格するのはおよそ三分の一である．台湾では，熾烈な競争に打ち勝たなければ高等教育を受けることができないのである（表4）．現在でも台湾政府と国民はこうした状況を重大な社会問題であると認めることについて意見の一致を見ているが，解決策については合意にいたっていない．

表2　小学校就学率

	男子	女子	計
1907	—	—	4.50
1910	—	—	5.76
1920	39.11	9.36	25.11
1930	48.86	16.57	33.11
1940	70.56	43.64	57.56
1944	80.86	60.94	71.31
1951	93.44	68.58	81.49
1955	95.93	87.92	92.33
1960	97.47	93.58	95.59
1970	98.25	97.74	98.00
1980	99.72	99.73	99.72
1990	99.89	99.89	99.89

資料：1944年以前についてはTsurumi1977：148より
その他は中華民国教育年鑑より

表3　各国における教育の現状

	中等教育就学率	高等教育就学率	識字率
台湾	85.4	34.1	92.4
シンガポール	58.0	11.8	87.6
香港	66.0	13.1	88.1
フィリピン	54.0	28.2	89.7
韓国	79.0	39.2	96.3
日本	96.0	30.7	100.0
イギリス	79.0	23.5	100.0
西ドイツ	85.0	33.7	100.0
オランダ	82.0	32.4	100.0
アメリカ合衆国	88.0	63.1	95.5

表4　各段階における卒業者の進学率

	小学校～中学校			中学校～高校			高校～大学		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
1950	36.93	24.91	31.78	56.07	39.38	51.15		39.76	
1955	48.93	36.16	43.94	67.21	54.41	63.13		38.30	
1960	61.31	40.87	52.24	82.59	64.02	75.88		43.41	
1965	67.97	46.93	58.23	81.22	74.47	78.52		38.30	
1970	86.84	69.56	78.59	81.76	84.04	82.66	33.88	54.62	41.92
1975	94.17	84.43	89.47	64.14	67.97	65.82	35.31	46.26	39.80
1980	97.99	94.19	96.14	63.10	67.48	65.16	39.92	50.74	44.64
1985	99.07	98.38	98.73	70.08	72.62	71.31	35.53	45.68	40.19
1990	99.98	99.56	99.77	81.40	88.09	84.70	46.38	50.94	48.58

教育に対する期待

上記のような問題点を効率的に検証するために，台湾における「社会変化調査」の結果を分析する．「社会変化調査」とは，筆者の指揮下において，1985年以降定期的に全国レベルでサンプリングによる質問紙調査を行ない，社会変化についてのデータを集めたものである．この研究ではその中から1985年のデータと1990年のデータを分析に使用した．標本設計については，1985年の調査ではchun（村）とli（里）を第一次抽出単位とし，1990年の調査ではhsing(郷)，cheng（城），chu（区）をそれぞれ第一次抽出単位とした．第一次抽出単位の違いによるサンプリングのわずかな差は有意ではないと考えられる．

1985年及び1990年の調査の両方で，次のような質問を設定した．「男子（女子）は最低どの程度の教育を受けるべきか．1．小学校，2．中学校，　3．高校，　4．短期大学，　5．大学，　6．大学院，　7．その他」ただし，1985年の調査では回答の7を「レベルが高ければ高いほど良い」とし，8を「その他」とした．このただ一つの違いが結果として大きな違いを生んだ．というのは，1985年の調査時に「レベルが高ければ高いほど良い」と言う回答が非常に多かったので，1990年にはこの選択肢を外したためである．十分な理由があってこの選択肢を選んだ回答者もいたであろうが多くの回答者はそうではなかった．この回答が多すぎると，回答者の考えが歪められてしまう．従って，1985年のデータと1990年のデータを直接比較することはできない．しかし，この項目を除いて比較すると，二つの調査データには有意な類似性があることが認められる．

男子と女子のそれぞれにどこまでの教育を受けさせるべきかという点について，二つの非常に重要な結果が得られた．一つは，男子には女子よりも高度の公的教育を受けさせるべきだと考える傾向である．もう一つは，子供の教育に関する意識が，回答者の性別，年齢，学歴，及び都市居住経験といった要因に大きく影響されるという点である．

1985年の調査では，男子に対する教育の期待度は3.66，女子は3.33であった．標本数は2,500以上であり，標準偏差はいずれも1未満であったことから，この差は大きく，有意であると考えられる．1991年の調査では男子が3.79，女子が3.38と，同様の差が認められた．1985年の調査よりもその差が大きくなっているように見えるが，上記のように両データを直接比較することはできないので，その妥当性には確信を持つことが

できない．しかしながら，男子に対する期待と女子に対する期待に差があるということは証明できる．家父長制の社会では，学問などの社会的業績に関して男性が女性よりも常に優れていることが求められる．しかし，現代の社会においては男女の平等が強く求められている．産業化し，専門化しつつある社会では，女性の職業への参加が重要視されている．さらに，台湾の女子学生は男子学生よりもどのレベルにおいても，学業成績がよく，1970年以降，高校卒業者の高等教育への進学率は女子の方が男子より高くなっている．このように，教育の期待という面での男女差は未だ存在するものの，その差は小さくなりつつある．即ち，男子も女子も，高校か短期大学適度の教育を受けることが望ましいと考えられているのである（調査におけるコード化では，高校には３，短期大学には４という数値が割り当ててある）．その差は女子は高校に近い程度の教育が期待され，男子には短大に近い程度の教育が期待されているということの差である．

台湾の人々のほとんど全てが教育の重要性を認識しているが，その教育の期待度には個人の社会的地位が大きく影響している．社会的地位の主要な指標である性別，学歴，及び都市居住経験が回答者の，男女の教育期待に影響を与えている（表５）．その中でもっとも影響力が大きいのは，回答者の学歴である．近代の台湾社会では職業上の地位や収入が学歴によって左右されるので，高い教育を受けたものが教育の重要性を主張し，子供達に高い教育を受けさせようとする．さらに，教育の価値は高等教育のプロセスを通じで内面化される．反対に，低い教育しか受けていない者には教育の価値を理解することができない．低い教育しか受けていない両親の中には子供達の教育に強いモチベーションを持つものもいるが，彼らは近代の教育の真の価値を理解しているわけではないだろう．つまり，回答者が受けた教育のレベルが，子供の教育に対する期待度に影響を与えているのである（標準回帰係数は.302と.481の間であった）．但し，女子の教育のレベルに対する期待度の方が男子のものよりもわずかに大きい．

表５　男子及び女子に対する教育の期待度（標準回帰係数）

	1985		1981	
	男子	女子	男子	女子
性別	.120***	.102***	.157***	.125***
年齢	.172***	.143***	.136***	.124***
学歴	.302***	.335***	.425***	.481***
大都市部居住体験	.086***	.087***	.146***	.109***
市部居住体験	.038	.036	.064	.006
cst	2.917***	2.629***	1.688***	1.635***
RSQ	.083***	.099***	.178***	.210***
標本数	2703	2991	2046	2052
平均	3.660	3.329	3.786	3.378
標準偏差	.985	.895	1.035	.903

*** $p < .001$

性別は社会的地位の一要因であり，教育への期待度に強い影響を及ぼす．女性の回答者は男性の回答者と比べて男の子と女の子の双方について男性より低い期待度を示す傾向がある．現実に，女性の教育程度は常に男性よりも低いのが普通である．例えば，この調査では男性回答者の53％が高校以上の教育を受けている

が，女性の回答者はわずか38％である．しかし，ここでの回帰分析では，回答者の教育程度の差を独立変数として考慮しているため，男性回答者と女性回答者の間の教育程度の差がもたらす影響はあらかじめ取り除かれている．言い換えると，性別による真の影響は男女が抱く信念の違いに起因するものであり，それは男女の現実の教育程度によって影響を受けていると考えられるのである．女性は男性よりも低い期待を持っているために，女性の地位が低いまま維持されているのかも知れない．こうした性別による意識の違いは注意深く考慮する必要がある．

年齢による効果は極めて独特である．年齢と子供の教育への期待度の単相関は負かつ有意である【訳注；このデータは収拾されていない】．しかし，【重】回帰分析を行なうと，教育への期待度に年齢が与える純粋な影響は正であって有意との結果である．回答者の年齢は教育程度と相関関係にあり，回答者の教育程度は子供達への教育の期待度と相関関係にあるということはかなり確かだと言えよう．つまり，年齢という変数は教育の差という変数によってかなり影響を押さえられている．より興味深いのは，年長者ほど子供の教育に対する期待度が高いという傾向である．これは教育を重んじるという中国の伝統を示しているのかも知れない．

社会的地位の一要因である都市地域での居住経験は，子供の教育への期待に大きな影響を及ぼす．教育の機会という点で全国の各地域を比較すると，ある不平等が認められる．都市部居住者には非都市部居住者と比較してより高い，より多くの教育を得る機会がある．そして，彼らは子供の教育に高い期待を寄せている．都市部居住者の回答には大きな幅があるので，都市部に住んでいることによる影響は限定されている（ベータ係数の値は.086から.146の間であった）．しかしながら，社会的地位を示す三つの要因，即ち教育程度と性別と都市居住経験は子供の教育の期待度に対して重要な影響力を示している．この分析結果はほとんど全ての人々が教育を高く評価している場合でも，個人の現実の社会的境遇が教育の期待度に影響を与えていることを暗に意味しているのであろう．こうした意識の違いが社会階層内部の不平等性を維持している一つの要因であろう．しかしその一方で，社会的地位の低いものが高い教育を得る可能性もある．なぜならば，重回帰係数が.083から.210と広い範囲にわたっているからである．

教育の価値

最初の調査の質問には，「個人にとってもっとも重要な教育の目的は何か」というものがあった．この設問に対する選択肢は以下の８つである．「１．よい職業につくこと　２．より高い会社会的地位をうること　３．精神面での修業　４．自己成長と自己実現をはかること　５．知識と技能をうること　６．思考能力をつけること　７．礼儀を身につけること　８．理想的な配偶者を見つけること」．この質問に対する回答から，台湾人が持つ教育の価値を説明する４つのカテゴリーが構成された．その第一は，教育を一つの手段とする考え方である．つまり，人々は教育をよい仕事を見つける，より高い社会的地位を獲得する，理想的な配偶者を見つけるといった現実的な目的を達成するための手段ないし道具としての働きを強調する．第二のカテゴリーは，自己啓発と自己実現を促進させ，精神面での進歩を推し進めるために教育を受けるという考え方である．第三のカテゴリーは，知識や技能をうるというように，自己の能力を強化するために教育を受けるという意識であり，第四は社会の教えにしたがって礼儀を身に付けるという伝統的な考え方である．

調査結果では，回答者の数は各カテゴリーに均等に分類できる．教育を手段と見る回答者は24％，自己実現のためとする回答者は24％，能力強化のためとする回答者は25％，礼儀を身に付けるためとする回答者は24％である（表６）．これは非常に意味ある結果である．どの教育目的も，台湾の人々にほとんど同率の支持を得ている．このことはこの分類が極めて有用であり，それらが中国社会において認められている価値を代表しているということを証明している．

表6　年齢と学歴による教育観の違い

		「手段」		「自己表現」		「能力を得る」		「人間関係を学ぶ」		「無回答」	
		回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1985年											
20～34歳	中学卒業者	191	24.1	152	19.1	219	27.6	224	28.2	8	1.0
	高校卒業者	47	9.1	180	34.9	147	28.5	138	26.7	4	0.8
	大学卒業者	17	4.9	191	54.7	80	22.9	59	16.9	2	0.6
35～49歳	中学卒業者	327	29.8	144	13.1	284	25.9	330	30.1	13	1.2
	高校卒業者	23	12.6	56	30.6	52	28.4	52	28.4	0	0.0
	大学卒業者	14	9.2	64	41.8	43	28.1	31	20.3	1	0.7
50歳以上	中学卒業者	306	33.8	100	11.1	220	24.3	251	27.8	27	3.0
	高校卒業者	17	15.9	19	17.8	35	32.7	31	29.0	5	4.7
	大学卒業者	5	6.3	27	33.8	20	25.0	24	30.0	4	5.0
1991年											
20～34歳	中学卒業者	119	31.6	55	14.6	105	27.9	85	22.5	12	3.4
	高校卒業者	81	17.4	166	35.6	142	30.5	70	15.0	7	1.5
	大学卒業者	38	12.5	178	58.6	58	19.1	18	5.9	12	3.9
35～49歳	中学卒業者	198	37.0	77	14.4	126	23.6	110	20.6	24	4.9
	高校卒業者	35	16.6	58	27.5	66	31.3	52	24.6	0	0.0
	大学卒業者	27	15.1	78	43.6	30	16.8	39	21.8	5	2.8
50歳以上	中学卒業者	158	42.8	30	8.1	67	18.2	76	20.6	38	10.3
	高校卒業者	6	10.9	21	38.2	9	16.4	14	25.5	5	9.1
	大学卒業者	5	14.7	15	44.1	6	17.6	6	17.6	2	5.9

一連のロジステック回帰分析の結果，過去数年間における興味深くかつ有意義な傾向が認められた（表7）．主な傾向では，教育の手段的価値を強調する人が増え，伝統的な人間関係を学ぶことを目的とする人が減っている．自己実現のため，あるいは能力開発のためと考える人の割合には有意な変化が見られない．価値の時間的変化に関するベータ係数の値は以下のとおりである．教育を手段と考える：.472(p<.001)，人間関係を学ぶ：-.392(p<.001)，自己実現のため：-.085(p>.05)，能力開発のため：-.114(p>.05)．

ロジスティック回帰分析によれば，教育の手段的価値に対する時間，教育の程度，宗教，性別の正味の影響【net effect】は有意である．1990年の調査では，教育を手段と考える回答者の割合が以前より増えている．80年代後半，台湾の人々は苛烈で急速な政治的経済的変動を経験した．特に1986年から1988年にかけては，多くの人々が非合法の投資に手を出し，宝くじを熱狂的に買い求め，株式や不動産の思惑買いに走った．人々は金のことで気が狂ったようになっていた．この騒ぎの中にあって，教育の価値は軽視された．そのような異常な経済状況を経験した後，教育の手段的価値が再び強調された．同じ時期の急速で不安定な政治変化も，教育の価値の変容に寄与している．

現代社会において，人々の態度と価値観に重要かつ決定的な影響を与える教育はまちがいなく台湾人の教育に対する価値観に影響を与えている．分析結果から，回答者の受けた教育の程度は，教育に対する価値観に対して負の相関を持ち有意である（B=-.143, p<.001）．高い教育を受けた人々は，教育の手段的価値を強調しない傾向がある．彼らは高いレベルの教育に啓発され，観念的で非物質的な価値を内面化しているのであろう．低い教育しかうけていない人々は，前節に述べたとおり，子供の教育への期待度が低いだけでなく，教育の手段的価値を強調している．このようにして，教育の階層構造は安定し，学歴という財産が子供へと引き継がれていくのであろう．

表7　教育観のロジスティック回帰分析

変数	B	S.E.	Wald	df	有意性
「教育は手段にすぎない」					
調査年	0.472	.066	52.054	1	.0000
性別	0.136	.630	4.584	1	.0323
年齢	0.005	.003	3.035	1	.0815
学歴	-0.143	.009	283.727	1	.0000
宗教			14.852	6	.0214
仏教	-0.334	.126	6.965	1	.0083
大衆仏教	-0.021	.066	.105	1	.7457
道教	0.036	.106	.116	1	.7336
土着宗教	0.128	.067	3.649	1	.0561
キリスト教	-0.14	.138	1.038	1	.3082
その他	0.318	.202	2.480	1	.1153
定数	-1.107	.218	25.682	1	.0000
「教育は自己実現をはかるためのものである」					
調査年	-0.085	.065	1.698	1	.1925
性別	0.085	.065	1.716	1	.1903
年齢	-0.013	.003	20.557	1	.0000
学歴	0.172	.009	397.933	1	.0000
宗教			19.732	6	.0031
仏教	0.088	.108	.663	1	.4154
大衆仏教	-0.193	.067	8.273	1	.0040
道教	0.048	.101	.228	1	.6331
土着宗教	-0.106	.069	2.388	1	.1223
キリスト教	0.183	.114	2.545	1	.1106
その他	-0.159	.214	.553	1	.4573
定数	-2.246	.220	104.578	1	.0000
「教育は能力を得るためのものである」					
調査年	-0.114	.062	3.427	1	.0641
性別	-0.156	.060	6.765	1	.0093
年齢	-0.007	.003	7.095	1	.0077
学歴	0.011	.008	2.103	1	.1471
宗教			7.258	6	.2976
仏教	0.028	.106	.068	1	.7937
大衆仏教	0.12	.062	3.690	1	.0547
道教	0.008	.098	.007	1	.9323
土着宗教	0.064	.065	.977	1	.3231
キリスト教	-0.093	.120	.594	1	.4411
その他	-0.025	.209	.014	1	.9045
定数	-0.56	.203	7.608	1	.0058
「教育は古来の道徳観を身につけ，人間関係を学ぶためのものである」					
調査年	-0.392	.065	36.324	1	.0000
性別	-0.121	.062	3.812	1	.0509
年齢	0.003	.003	1.586	1	.2080
学歴	-0.017	.008	4.918	1	.0266
宗教			23.352	6	.0007
仏教	0.129	.106	1.474	1	.2247
大衆仏教	0.155	.155	6.022	1	.0141
道教	0.004	.004	.001	1	.9697
土着宗教	-0.061	.067	.828	1	.3629
キリスト教	-0.036	.122	.089	1	.7658
その他	0.082	.082	.144	1	.7049
定数	-0.455	.208	4.775	1	.0289

仏教徒には教育の手段的価値には賛成しない傾向がある(B=-.334,p<.001)が，土着宗教の信者にはその逆の傾向がある B=.128, P<.10)．この違いは大変に意義深く，両宗教の根本的な違いを反映している．仏教は制度化された宗教で，究極の真理と自己修養を強調する．仏教徒にとって，個人の幸福は副次的なものである．一方，台湾の土着宗教は教義が確立されないままに広まったものであり，非常に実利的な指向を持つ．80年代の後半には多くの寺が宝くじの「当たる番号」を発表したことさえあった．明らかに，土着宗教の実利指向は教育の手段的価値と親和性を持つ．仏教の教義の指向とは相反する．

教育の自己実現としての価値に対して，教育程度や年齢，それに宗教が有意な影響を及ぼしている．教育の手段的価値とは反対に，教育の自己実現の価値は逆の影響を持つ．言い換えれば，高い教育をうけた人は教育に手段的価値を強調せず，自己実現を教育の目的として認める傾向がある．

子供の教育への期待に対する年齢の影響を検討した結果，正の相関があることが分かった．即ち，年齢が上の人ほど期待度が大きい．しかし，年齢の自己実現に対する効果は負の相関を示して有意である．このことに対応して，年齢の手段的価値に対する関係はわずかに正の相関を示している．この関係は有意ではなかったが，正の相関という方向は意味があるだろう．こうした結果により，次のような考え方を導くことができる．(1) 老人は，教育の手段的価値の効用を確かなものにするために，子供がより多くの教育を受けることを望んでいる．(2) 手段的価値は自己実現とほぼ対極的な位置にあり，年齢はこの２つの価値に全く違ったふうに影響する．

1985年から1990年まで，教育の目的を自己実現と考える回答者の割合に大きな変化は見られなかった．しかし，高い教育を受けた人々の数は一定だとは限らない．ロジスティック・モデルでは交互作用を考慮することはできないが，高学歴の同年齢の回答者集団同士を比較すると差を認めることができる【訳注：表６参照】．大学卒業者については，1985年の若いコホート【年齢集団】の54.7%が教育は自己実現のためと答えたが，1990年の同年齢集団では58.7%であった．中年齢集団では41.8%と43.6%，高年齢集団では33.8%と44.1%であった．大学卒業者では，どの年齢集団においてもこの回答の割合が増加している．しかし，中学校に行っていない回答者の場合は，若年集団と高年齢集団はこの割合が減少し，中年齢集団で若干の増加が見られる．高校卒業者では，３つの年齢集団において全く異なる傾向が認められる．従って，時間による純粋な効果，即ち２つの調査結果の，時間による差を証明することはできないが，年齢と教育効果の交互作用があるということは重要な分析結果であろう．言い換えると，大学卒業者はどの年齢グループでも，教育は自己実現のためという回答者の割合が増えている．教育の程度がそれよりも低いグループでは，そのような傾向を見つけだすことはできない．

儒教では，道徳及び知性の向上は目に見えるものではないとされる．つまり，古典の意味を理解することが，道徳の原理を理解することなのである．孔子は次のように言っている，「天が与えたものが自然であり，自然に従うことが道であり，道を修めることが教えである」（天命之謂性，率性之謂道，修道之謂教－『中庸』より）．また，次のようにも言っている「若者は家にあっては親を敬い，外にあっては目上のものを敬え．誰にも惜しみなく愛を与え，よい友達を作れ．以上のことを実行し，なお余力があれば勉学に勤しめ」（弟子入則孝　出則弟勤　而信汎愛衆　而親仁　行有餘力則以學文－『論語』より）．中国人の教育の伝統は儒教に大きく影響されている．人の品位を養うことが教育の土台であった．現在でも多くの人々や教育者はこの伝統の影響を受けており，教育の主要な目的は学生にどのように他人とうまくやって行くか，どのようにして立派なふるまいをするかを教えることであると主張している（做人處世）【訳注；「人と做（な）りて世に處（しょ）する」立派な人間になって世間で礼儀正しく生きて行く】．

教育は礼儀を身につけるためと考える回答者の割合は1985年で27.1%であったが，５年後には18.6%に減少した．ロジスティック・モデルでは他の変数の影響がコントロールされているので，この変化は大きく，

有意である（B=-.392, p<.001）．この結果から，教育についての伝統的な考え方をする人々が減っていることがわかる．教育を自己実現のため，あるいは能力を身につけるためと考える回答者の割合には意味のある変化が見られないので，教育を自己実現のため，あるいは能力をつけるためと考える考え方の変化の対比をさらに検討する必要がある．言い換えると，手段的価値を強調する回答者は増えているのに対して，人間関係を重視する伝統的な社会道徳を教育の目的と考える回答者は減っている．このような正反対の方向の変化は，単に，社会全体に及ぶ社会変動の衝撃のもとに伝統的な道徳教育に対する信念が弱められたことを示唆しているばかりでなく，手段的価値が伝統的な道徳的価値と広い範囲において取って代わる傾向があることをも意味している．

時間的な変化に加え，教育程度と宗教もまた伝統的な，教育の道徳的価値に対する信念に重大な影響を及ぼしている．教育程度との相関は負である（B=-.017, p<.05）．いくつかの年齢グループにおいて互いに矛盾する状況が存在しているので，この影響は大きなものとはなっていない．1985年の調査における高年齢コホートでは，異なる教育程度を持つサブグループ間の相違はきわめて小さく，その方向は他の年齢コホートとは正反対である．高年齢コホートにおいては，教育の程度は，伝統的な教育の道徳的価値を支持する信念に及ぼす影響の有意義な要因とは思われない．1991年の調査では，高年齢コホートの中では，高校教育を受けた人々は，小学校教育しか受けない人や高等教育を受けた人々よりも多くこの価値に賛成する傾向がある．中年齢コホートも似通った傾向を示す．即ち高校教育を受けた人は，そうでない人よりも多く教育の伝統的な価値を受け入れている．

以上の結果をまとめると，高年齢グループは1985年と1990年の両調査で，また中年齢コホートは1990年の調査で，いずれも高校教育を受けた人々が，伝統的な道徳的価値を維持することにおいて保守的であるように思われる．高年齢及び中年齢グループのこのような独特な傾向が教育の影響力を減じている．高年齢コホートとは正反対に，若年齢コホートは，より多く，はっきりと教育の効果を示している．いずれの調査においても若い人は教育の程度が高いほど伝統的な教育の道徳的価値を否定する．例えば，1985年の調査では，大学教育を受けた若い回答者の17%がそのような価値を承認しており，高校あるいはそれ以下の教育しか受けていない人の28%が承認している．1990年の調査では，前者では6%だけがこの価値を支持しているが，後者ではなおも23%の人がこの伝統的な教育の道徳的価値に同調している．

民間仏教の信者は，他の宗教の信者よりも，教育の伝統的な道徳的価値に賛成する傾向がある．以前の調査（Chiu, 1993）では，民間仏教は呪術の使用や信仰行動に関して土着宗教と大変似ていることが明らかになったのだが，両者の間には当然ながら微妙な様々な相違がある．中国人が自分は仏教徒であると言うときは，道徳のことを特に気にしてそう言う場合が多い．これは正統派の仏教徒でも同様である．民間仏教徒の回帰係数は.155，正統派の仏教徒は.129，土着宗教信者は-.61であった．

結　論

中国の伝統社会では，ほんのわずかの人々しか教育の機会に恵まれなかったが，教育は高く評価されていた．公的試験に合格すると，尊敬される社会的地位と富を伴った公的な身分を得ることができる．そのことが人々を動機づけ熱心に勉強させた．このような状況だったから，教育の目的は非常に手段的なものだった，しかし，教育の内容は，漢王朝時代以来，より支配的であった儒教の思想にしたがった道徳教育が主体であった．また，複雑な中国社会で生活するには読み書き能力が必要だった．上方への社会移動をなしとげるのに必要な数少ない方法として，教育は上流社会の人々だけでなく一般の人々にも重んじられた．大多数の人々が教育の機会には恵まれなかったので彼らの教育に対する肯定的な態度は教育の啓蒙によるのではない．いずれにせよ，中国の人々は伝統的社会において長い間，教育に高い価値を認めていたと結論できる．

西洋の強国の強い影響力が中国人を刺激し，教育システムの改革に向かわせた．短期間の過度期と抵抗の後，新しい学校が次々と建設された．中国人は教育に対する敬意の念を維持し続けた．中国人が教育を受けたいという意欲を持っているということは，過去数百年の歴史を見れば明らかである．20世紀始めの20年間に，日本の植民地政府は台湾に近代的な教育システムを作り上げた．第二次世界対戦の終わりには1,000校以上の学校が設立されており，男子の80%以上，女子の60%以上が小学校に通っていた．1950年以降になると，中華民国政府の統治のもとで，教育の急速な拡大が進行した．1990年頃には，台湾の中等教育及び高等教育への登録率は世界最高の水準にある．

1950年以降，教育の拡大は世界のほとんど全ての国々でおこったが，台湾における状況は極めてユニークなものであった．台湾における教育の急速な拡大と，高等教育を受けるための厳しい競争は個人的な価値観と動機の見地から説明できると思われる．全国規模で行なった二回の調査結果を分析し，個人の価値観が教育に対する考え方にどのような影響を及ぼしているか検討した．第一に，子供達の教育に対するかなり強い期待が見いだされた．しかし，この期待の大きさは個人の社会的地位と属性に影響を受けている．個人の学歴，性別，都市居住経験が，教育に対する期待度に大きな影響を与えている．このことから，既存の社会階層構造が教育の階層化を維持発達させ続けていることが確認できる．しかしながら，回帰モデルにおいて説明された変動の大きさが限定されているので【導入された要因だけでは十分説明されていないので】社会移動の余地は存在する．

二回の調査結果を比較すると，教育についての価値観には変化した部分と変化しない部分があることが分かった．1990年には，1985年よりも教育の手段的価値を認める回答が多いが，教育の目的として伝統的な社会道徳を学ぶことを選ぶ人は少なくなっている．このような対照的な傾向は，台湾における社会変化の一般的趨勢を示しているだけでなく，80年代半ばからおこったバブル経済による金銭的狂乱状態を反映するものである．教育によって自己実現をはかる，あるいは能力を身につけるといった考え方を強調する回答者の比率には有意な変化がない．経時的な変化に加えて，学歴と宗教が回答者の教育観に大きな影響を与えている．個人の教育上の成果自体が教育の価値に対する個人の態度に影響を与えるという事実は真剣に考察されるべきである．高等教育は啓蒙ための一つの制度であるが，それは自己実現をより強調する．これとは逆に，教育水準の低い人々は教育に手段的価値しか見いだせないのである．

参考文献

Bastid, Marianne

1988 Education Reform in Early Twentieth-Century China, translated by Paul J. Bailey, Ann Arbor: Center for Chinese Studies, The University of Michigan.

Borthwick, Sally

1983 Education and Social change in China, the Begining of Modern Era, Stanford: Hoover Institution Press.

Chiu, Hei-yuan

1988 She-huei hsin li hsueh lun (New Perspectives of Social Psychology), Taipei: Great Tide (in Chinese).

1989 Education and Social Change in Taiwan, in H. Hsiao et al eds., Taiwan: a Newly Industrialized State, Pp. 187-205, Taipei: Department of Sociology, National Taiwan University.

1992 Taiwan Ti Chu She Huei Pian Chian Chi Pen Tiao Cha Chih Shen Pao Kao(Report of Social Change Survey in Taiwan 1990, 1991), Taipei: Institute of Ethnology, Academia Sinica (in Chinese).

1993 On the Changes and Variations of Magical and Religious Behabiors from 1985 to 1990, Proceedings of National Science Council Part C: Humanities and Social Sciences (in Chinese).

Directorate-General of Budget, Accouning and Statistics 1991, Social Indicators in Taiwan Area of hte Republic of China 1991.

Hsu, Nan-hou
1993 Tai-wan Chiao Yu Shih (History of Education of Taiwan), Taipei: Shih Tahsueh yuan (in Chinese).

Kwang Hwa Publishin Company
1990 Republic of China Yearbook 1990-91, Taipei: Kwang Hwa Publishing Company.

Legge, James
1983(1935) The Chinese Classics, Volumn 1, Taipei:Southern Materials Center, INC.

Meyer, John W., Francisco O. Rammirez, Richard Ruinson, and John Boli-Bernet
1997 The World Educational Revolution, 1950-1970, Sociology of Education, 50: 242-58.

Ministry if Education
1992 Educational Statistics, 1992, Taipei: Ministry if Education, Republic of China.

Ramistm Leonard and Solomon Arbeiter
1986 Profiles, College-bound Seniors, 1985, New York: College Entrance Examination Board

Rawski, Everlyn Sakakida
1979 Education and Popular Literacy in Ch'ing China, Ann Arbor: The University of Michigan Press.

Taiwan Province Committee of History and Documentation
1970 Tai-wan Shen Tung Chih Chiao Yu Chin Chiao Yu She Shi Pia (Educational Facilities, History of Education, Gazettee of Taiwan Province), Taipei: Tsung Wen.

Tsurui, E. Patricia
1977 Japanese Colonial Education in Taiwan, 1895-1945, Cambridge: Harvard University Press.

Wang, Feng-chieh
1959 Chun Kuo ChiaoYu Shih (History of Education if China), 6th edition, Taipei: Cheng Chung (in chinese)

Woodside, Akexander
1989 The political inevitability of school reform in late Imperial China, paper presented at the Confrerence on Education and So ciety in Late Imperial China.

Yang, Kuo-shu and Hei-yuan Chiu
1993 Tai-wan Ti Chu She Huei Pian Chian Chi Pen Tiao Cha Chih Shen Pao Kao (Report of Social Change Survey inn Taiwan, 1984-85), Taipei: Institute of Ethnology, Academnia Sinica (in Chinese).

(付　記)

ここに訳出した論文は1993年にスペイン・マドリッドのコンブルテス大学で行われた「世界価値観調査マドリッド国際会議」のパネルセッションに提出されたものである．このセッションの提出論文は，関西学院大学社会学部の真鍋一史教授をリーダーとする研究グループにより分担翻訳が企画された．本稿では宇田川が担当した台湾国立大学の研究者の論文を紹介する．他の論文の翻訳としては，

Ronald Inglehart　著，近代化とポスト近代化：経済発展と文化変化と政治変動の相互の関係の変化，

真鍋　一史　訳，関西学院大学社会学部紀要，第77号，123－149ページ，
1997年3月

がある．世界価値観調査については，

真鍋一史，栗田　真樹，劉　志明，加藤　敬子，李　鍾煥，
R．イングルハート（R.lnglehart）の「世界価値観調査(World Values Survey) デー タ」の
二次的分析のための準備作業，関西学院大学社会学部紀要，第75号，67－82ページ，
1996年10月

が詳しい．

本論文の労をとっていただいた真鍋教授ならびに中国の故事，人名などについて教えていただいた本学漢文学高木重俊教授に心から感謝したい．

(本学教授　函館校)